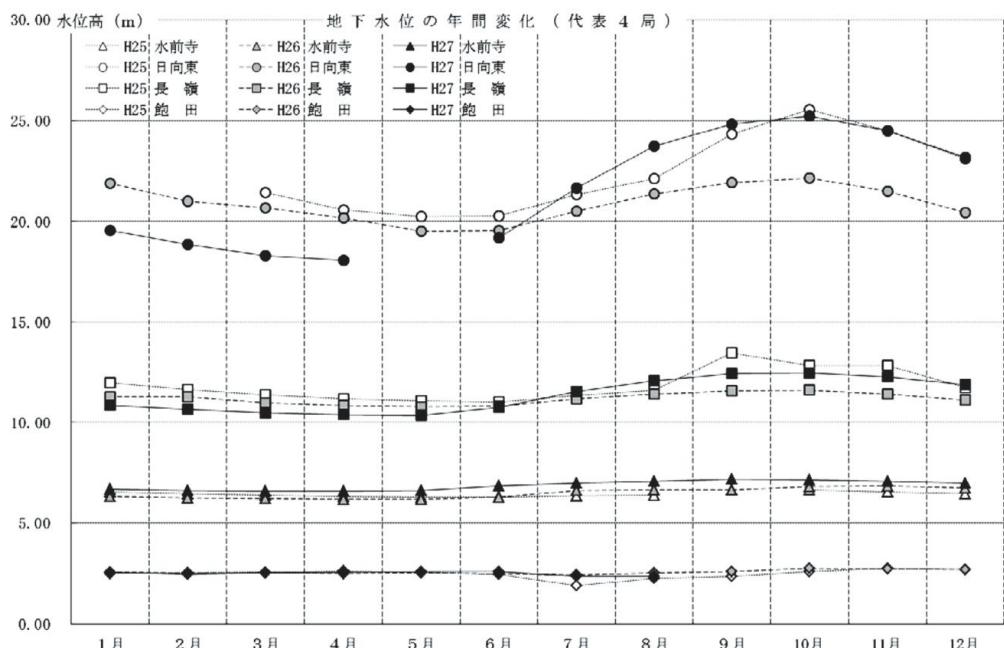


①観測データの隨時共有、および自由な期間指定による変動グラフ自動作成

- 「地下水年報」「地下水調査報告書」等は、調査の翌年度に冊子・PDF等で公表され、掲載される地下水位変動グラフ等は、単年度や過去10年など、定型的に整理されている場合が多い。
- 地下水データベースを活用し、毎月のデータ回収時に観測水位等を登録すれば、地下水協議会の関係者間や地域の地下水関係者が毎月、最新データを共有できる。
- 地下水データベース上で、自由に対象期間を指定して、変動グラフ等を自動で作成できる。

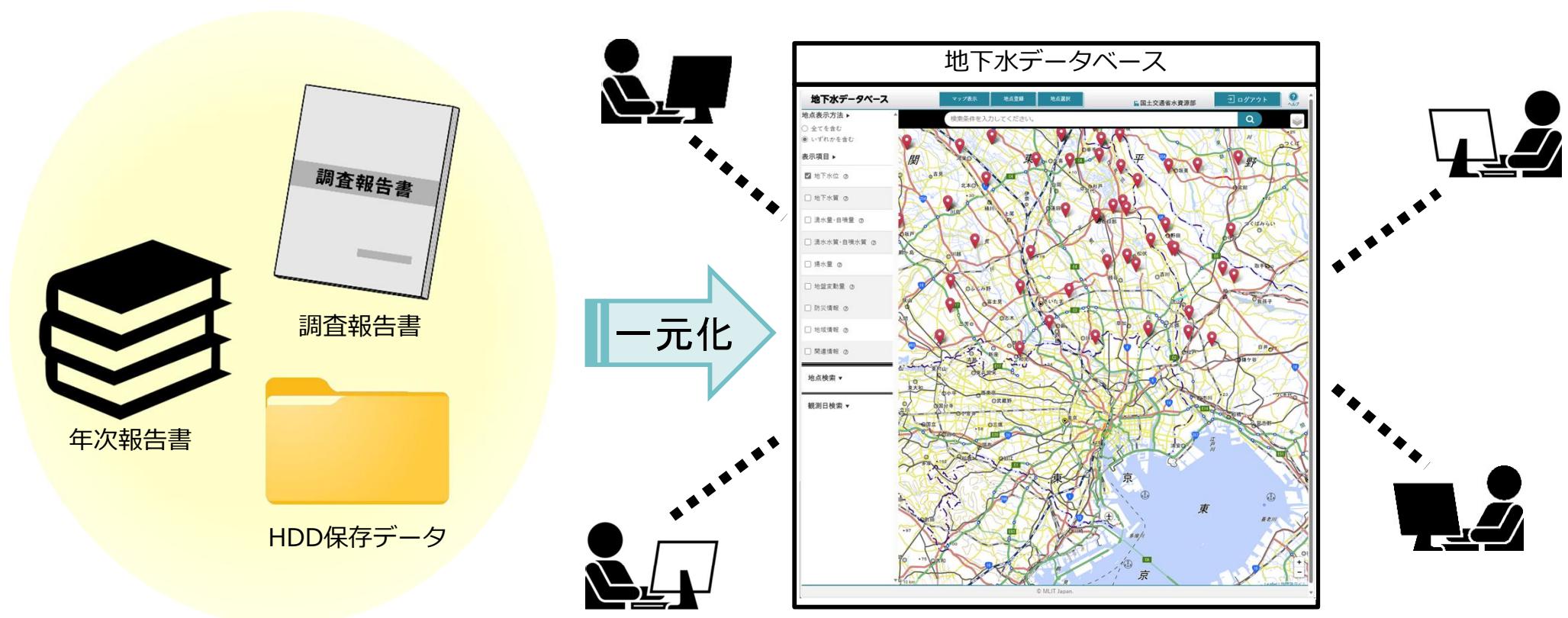


- 地下水年報等は翌年度に公表
- 年間グラフ、10年グラフなど定型化されている



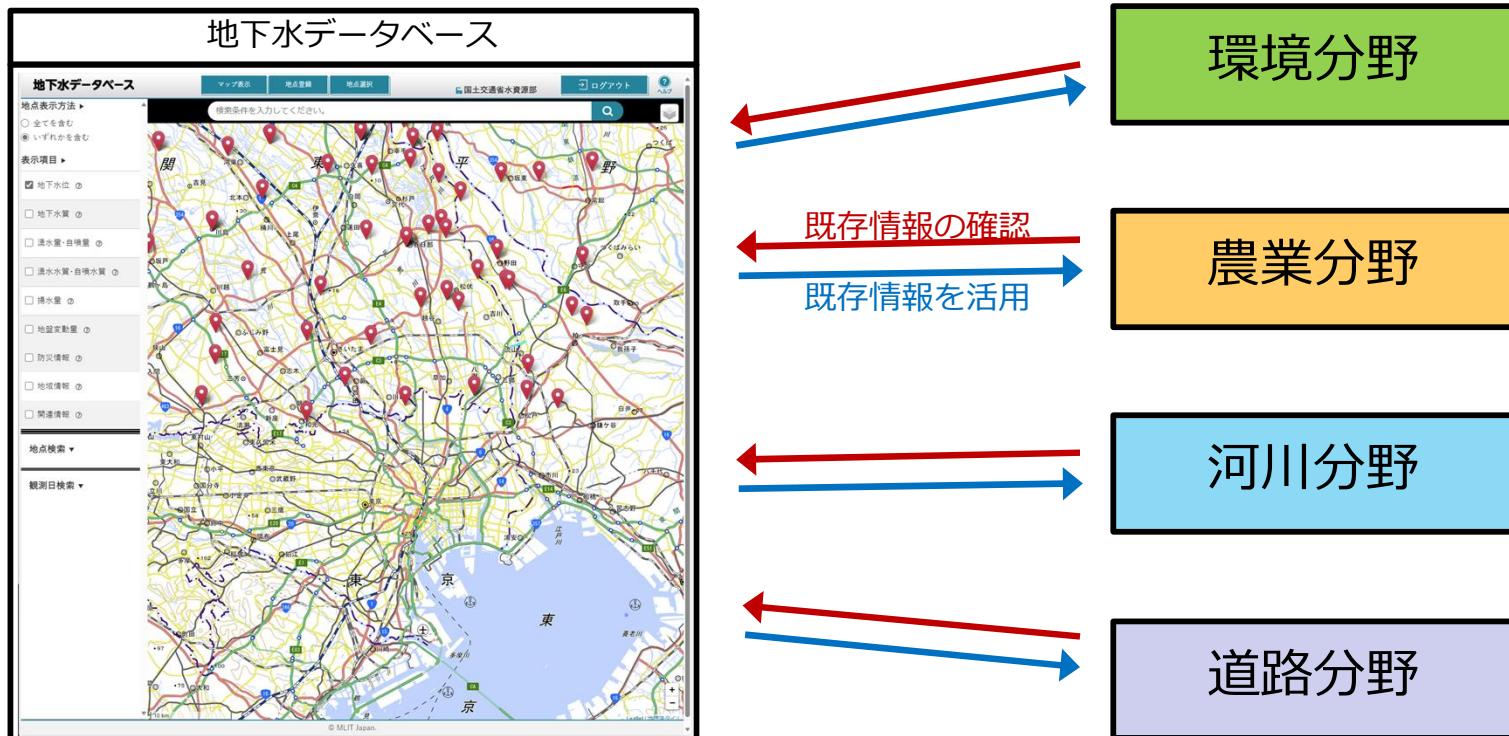
②データ一元化による、担当者交代や関係者間における確実なデータの引き継ぎ

- 従来、地下水担当者が変わったり、関係者間で観測データ等をやり取りする場合、地下水調査報告書等の紙資料やハードディスク上の保存データを引き継ぐ場合が多い。
- 報告書等にデジタルデータが含まれていても、個々に保管されているため、データを統合して利用するには手間がかかり、デジタルデータが残っていない場合もある。
- 地下水データベースは、一元的にデータを保存する書庫としても活用でき、必要な井戸の必要な期間のデジタルデータをダウンロードでき、報告書等のやり取りは不要となる。



③既存観測地点等の見える化による調査コスト縮減、効率化

- 各部署が情報共有をせず、それぞれの目的で地下水調査を実施した場合、同じ地区で地下水調査を行ったり、既存データが活用されない場合がある。
- 部署や調査目的に関わらず、既存の地下水調査・井戸調査・ボーリング孔内水位等のデータを地下水データベースに登録すれば、既存データの有効活用や同じ地区での重複調査の回避等により、調査コストの縮減や効率化を図れる。



地下水データベースを介した情報共有・活用

④防災井戸、名水等の地下水に関する地域情報の発信・共有・活用

- 災害で断水した場合に非常時用水を得られる防災井戸の位置や、地域の観光資源である名水の情報などをWeb上で発信し、地域住民や来訪者で共有することができる。
- 「地下水」を切り口として、地域の水資源や防災水利、水文化を学ぶ、環境学習や総合学習のツールとして活用できる。

防災情報

防災井戸



深さ100メートル前後の深井戸は、普段は飲料水として使われておますが、災害時でも使えるように非常用発電機を置いてポンプを作動させるよう施したものです。蛇口や消火栓を設けておりますので飲料用・消火活動用として使用できます。

[PDFダウンロード](#)

環境学習・総合学習等の
ツールとしての活用イメージ
写真出典：教育ICTガイドブック（総務省）

地域情報

安曇野わさび田湧水群（長野県安曇野市）



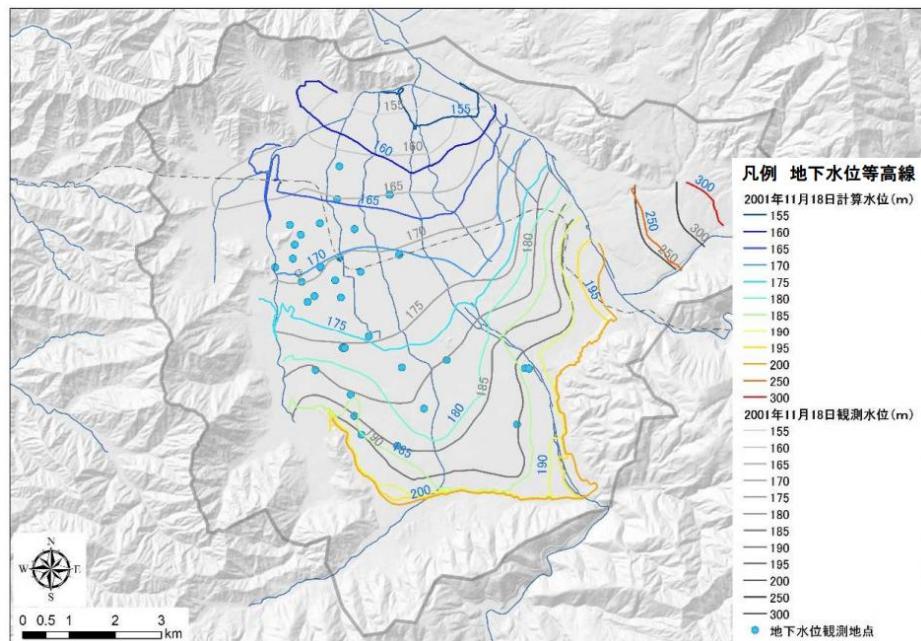
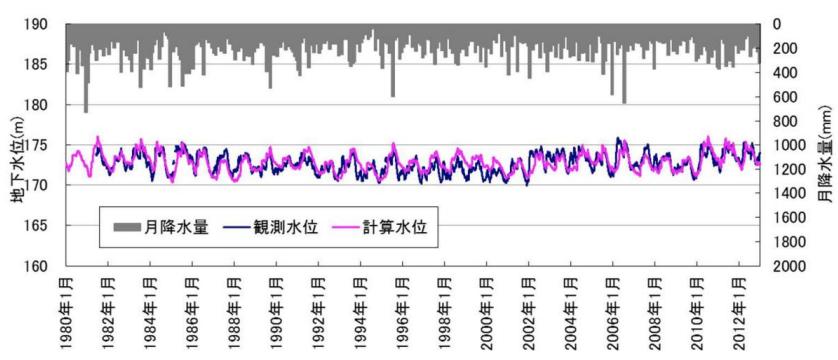
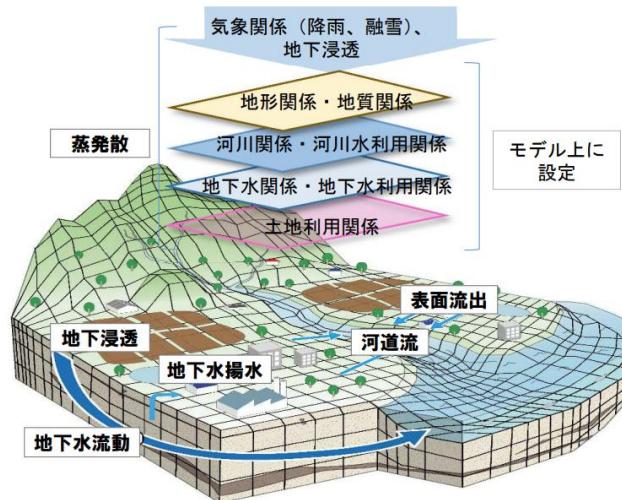
「安曇野わさび田湧水群」は、北アルプスからの雪解け水が伏流水となって湧き出し日量70万トンもの湧水量を誇る。真夏でも水温が15度を超えることがない清らかで豊富な水は生産量日本一を誇るわさび栽培やニジマス養殖を育むなど循環利用されている。また、安曇野市は国土交通省の「水の郷百選」にも認定されている。

[PDFダウンロード](#)

地下水データベースを活用した防災井戸・名水等の情報発信イメージ

⑤地下水シミュレーションにおけるモデル検証用データとしての活用

- 地下水シミュレーションモデルを構築する際、実際の降雨条件を与えた計算を行い、算出された計算水位と実際の観測水位を比較して再現性を検証する場合がある。
- モデルで対象としている地域で実際に観測された地下水位情報が必要となることから、地下水データベースの登録データがモデル検証用に活用できる場合がある。



出典：水循環解析に関する技術資料（国総研水循環研究室）